

聖書：創世記 38：1～30

説教題：私より正しい

日時：2024年5月5日（朝拝）

37章からヨセフを中心とした物語が始まりました。前回最後の37章36節では、ヨセフがエジプトでファラオの廷臣、侍従長ポティファルの家に売られて行ったと記されました。さてその彼はどうなったかと私たちは思いますが、今日の38章は四男ユダの話となっています。そして次の39章でまたエジプトにおけるヨセフの話に戻っています。そういう意味では37章から39章に飛ぶとうまく話につながりますが、その間にユダに関する話が入っていることとなります。ここからも37章2節から始まった「ヤコブの歴史」は単にヨセフにだけ関心があるのでないことが分かります。この後、創世記50章までに記される内容のメインテーマは、アブラハムへの約束に従ってヤコブすなわちイスラエルが神の摂理により、エジプトへ行くようになることです。そういう記録においてユダに関するものがこの38章に記されるのは今後の話の展開において彼が大きな役割を果たすからに他なりません。それどころか将来このユダから救い主メシアが誕生します。ヨセフからではないのです。そのユダはどういう人だったのか、彼はどのように神に導かれて行った人だったのか、今後の重要な伏線としてこの38章がここに収められていると言えます。

さてその38章は「そのころのことであった」と始まります。これは前回最後に記された、ヨセフが兄弟たちによってエジプトへ売り飛ばされた頃ということでしょう。「ユダは兄弟たちから離れて下って行き、名をヒラというアドラム人の近くで天幕を張った」とあります。彼はここで家族から離れて新しい歩みを始めます。彼がそうしようと思ったのも状況から考えると理解できます。ヤコブの家では父がヨセフだけをえこひいきしていました。彼だけにあや織りの長服を作ってやり、偏愛していました。そして彼が死んだと思い、父は彼のために泣き続けています。誰からの慰めも拒んでいます。ユダは愛されない妻レアの4番目の子どもです。私たちがユダなら、こんな家に居続けたいと思うのでしょうか。彼は父の家から離れて自分一人で新しい生活を！と願ったのでしょうか。そして2節に「そこでユダは、カナン人で名をシュアという人の娘を見そめて妻にし、彼女のところにいった」とあります。ここに彼に霊的な危機が訪れたことが書いてあります。これまで周りに住むカナン人と結婚すべきでないことは繰り返し語られて来ましたが、なのにユダは兄弟たちから離れた後、あっさりとカ

ナン人と結婚します。ここにユダは家族に背を向けたばかりでなく、神にも背を向けたことが分かります。新しい生活へ進んだ彼は神との関係もきれいさっぱり捨てて、このように振る舞いました。それでも最初はうまく行ったようです。カナン人の妻との間にユダは3人の男の子を得ました。長男エル、次男オナン、三男シェラの3人です。

しかし間もなくこの家に様々な問題が生じることとなります。まず6節に「ユダはその長子エルに妻を迎えた。名前はタマルといった」とありますが、長子エルは主の目に悪しき者でした。どんな悪であったかは書いてありませんが、「主は彼を殺された」とありますから、よっぽどの悪だったのだらうと思われます。ユダが神から離れてカナン人と結婚し、主を中心とする家庭を築かなかった一つの結果として、このような実が生じたと考えられます。それは次男についても同じでした。当時、兄弟が死んでその妻との間に子がない場合、死んだ者の兄弟が残った妻を妻とし、子を残すようにすべきであるとされていました。これはレビラート婚と呼ばれ、申命記25章5〜10節にその規定があります。ところが次男のオナンは兄が残した妻と関係を持ちながら、その役割を果たしませんでした。彼は兄の代わりに兄の子孫を残したところで自分のメリットはなく、かえって相続分が減る、と個人的な損得の観点から、その務めを果たさなかったのでしょうか。その「彼のしたことは主の目に悪しきことであったので、主は彼も殺された」と10節にあります。それで三男はどうしたのでしょうか。ユダはタマルに彼を与えませんでした。11節に「わが子シェラが成人するまで、あなたの父の家でやもめのまま暮らしなさい」と嫁に言ったとありますが、その本心は「シェラもまた、兄たちのように死ぬといけないと思ったからである」とその後を書いてあります。ここにヤコブの考えが示されています。それは嫁のタマルが悪いということです。彼女が疫病神である。彼女と関係を持ったら三男までもが死んでしまう。だから彼を与えることはできないとユダは考えた。しかし本当に悪いのはタマルなのでしょうか。悪いのはユダ自身ではないのでしょうか。彼が主から離れてカナン人と結婚し、成り行きに任せてこの世の価値観で子どもたちを育てた結果がこれだったのではないのでしょうか。なのに彼は人のせいにしています。嫁のせいにしています。これは私たちもしやすいことではないかと思えます。本当に悪いのは自分かもしれないのに他の人に責任転嫁し、他の人が災いの元であるかのように考える。こうして嫁のタマルは不当な扱いを受け、不名誉な状態に置かれたのです。

そんな中、タマルが一つの行動を起こしたことが 12 節以降にあります。かなり日が経ってユダの妻が死にました。その喪が明けた時、ユダは羊の群れの毛を刈るためにティムナへ上って行きます。そのことがタマルに知らされました。すると彼女はひと遊女に扮します。もちろん性的な欲望のためではありません。彼女にとってユダは義理の父です。彼女がこうしたのは、14 節後半にある通り、「シェラが成人したのに、自分がその妻にされないことが分かったから」でした。そこでタマルはユダの家の子を産む最後の方法として、このようないのちがけの方法に出たのです。ユダがやって来た時、タマルは「私に何を下さいますか」と問います。ユダが「子やぎを送ろう」と答えると、タマルは「何か、おしるしを」と求めます。そしてユダの印章とひもと杖を受け取ります。これは彼の身分証明書のようなものです。そしてユダは彼女のところに入り、タマルは子を宿しました。ユダは後日、子やぎを送って先に預けたものを取り戻そうとしますが、彼女を見つけられません。土地の人々に聞くと、ここに娼婦がいたことはないと言います。そこでユダはそれ以上探すのを諦めます。自分たちが笑いぐさになるよりは良いと考えて。

そうしてついにユダの罪が明らかにされる時が来ました。3 カ月ほどして嫁のタマルが姦淫をし、身ごもっている！と告げる者がありました。それを聞いたユダは「あの女を引き出して、焼き殺せ」と言います。そこでタマルは例の身分証明となる品々を提出し、「これらの印章とひもと杖がだれのものか、お調べください」と言います。これはユダ以外の人のものではありません。これはタマルと姦淫を行ったのはユダであることを明らかにするものでした。こうしてユダの罪が人々の前で突然明らかにされました。この時、ユダはどうしたのでしょうか。

彼の応答が 26 節にあります。「ユダはこれを調べて言った。『あの女は私よりも正しい。私が彼女をわが子シェラに与えなかったせいだ。』」ここで注目すべきはユダがすぐに自分の罪を認めたことです。これは彼の生涯において決定的なことだったと考えられます。これまでの彼はどうだったでしょう。先に見たように、彼は自分の罪に盲目でした。自分が悪いのに人のせいにしていました。その彼がここで「あの女は私よりも正しい」と言っています。このポイントは、悪いのは私だ、私が悪かったのだ！ということでしょう。もちろんタマルのしたことは褒められたことではありません。しかし彼女はユダから三男シェラを与えられないと分かった時、この家を捨てて他の男について行くこともできたのに、そうはせず、この家の人間としてとどまりま

した。そしてこの家に属する子を産むことを求め、今日見たような驚くべき賭けに出ました。これはタマルに対するユダのこれまでの不当な扱いを告発する行為でもありました。そこに正しさがあることをユダは認めたのです。それに比べて悪いのは自分である。自分が正しく振る舞って来なかったことが一番の問題であって、その私の悪がこのような形でさらけ出されたのだとユダは認めたのです。この状況でもなお理屈をこねて他者を批判することはできたかもしれません。タマルが私をだましたのであってタマルが悪い！私は犠牲者だ！と言うことができたかもしれません。しかしユダは他の人の罪ではなく、自分の罪を認めました。ここにユダの人生のターニングポイント、彼の新しい出発があったのです。これと似ている聖書の箇所としてダビデがバテシェバと姦淫の罪を犯した後、預言者ナタンに罪を指摘された時の話をあげることができます。あの時もダビデは似たような仕方での自分の罪を暴露されましたが、彼も即座に自分の罪を認めました。そして彼はすぐ主の赦しを受けました。このユダも同様であったと考えられます。ユダは悔い改めた者として「二度と彼女を知ろうとはしなかった」と 26 節後半にあります。彼は自分の罪を省み、自分を深くわきまえる者へと導かれました。

その変えられた彼の姿が、この後、創世記の中で記されて行くことになります。特にヨセフと兄弟たちの和解において大きな役割を彼は果たします。詳しくはまたその時に見たいと思いますが、末の息子ベニヤミンだけは行かせないとする父ヤコブに対し、私が責任を取りますと言って父を説得し、保証人としての重要な役割を果たすのがこのユダです。またエジプトへ行った時、ベニヤミンを置いて行け！と語るヨセフに、父のためにどうしても連れ帰られなければならないこと、そのために私が身代わりになります！と自らを差し出すのもこのユダです。彼は父ヤコブに失望し、反感さえ抱いていたはずですが、この苦しみと自分の罪の認識を通して父に同情できる人になります。父が子をなくして悲しんでいたように、自分も子をなくすことによって同じ悲しみを味わいました。また下の子を特別に守ろうとした父でしたが自分も同じようなことをしていることにユダは気づいたでしょう。またベールをかぶった女性にだまされて思わぬ苦境に陥った点も父と同じです。父を批判しながら結局は父と同じような歩みをしている自分です。そのような苦しみと自らの罪の認識を通して、父に対しても兄弟に対しても慈愛の心で接することのできる人へと変えられて行きます。そしてついにはその人々のために自分が身代わりになることまで申し出るという、まるでイエス様を前もって映し出す人にまで導かれて行きます。こうして彼はこの後の箇

所で人々を助け、導く大きな働きをする人となって行きます。思い起こすのはイエス様が十字架前夜にペテロにご自身を3回否認すると告げられた場面で、ルカの福音書22章32節でこう言われたことです。「しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」 自分の罪を自覚し、自分の弱さを本当に知った人こそ神の愛と恵みを真に知る者となり、他の人のことを深く思いやっ、真に力づける働きをする者になることができる。ユダはそのような主の変革の恵みにあずかって行くのです。

最後 27～30 節にはタマルから二人の男の子が生まれたことが記されます。先に一人が出て来て助産婦が「この子が最初に出て来ました」と言っ、その手に真っ赤な糸を結び付けたものの、その子が手を引っ込めた瞬間、もう一人の子が最初の子を押しつけて先に出て来ました。これはエサウとヤコブを思い起こさせる誕生の仕方です。本来弟となるはずのペレツが先に出て来て、その後で長男となるはずのゼラフが出て来ました。そしてこのペレツとゼラフはマタイの福音書冒頭のイエス・キリストの系図にその名が出て来ます。この内、ペレツの家系からやがてボアズが生まれ、ダビデが生まれ、そしてキリストが誕生します。何とこのユダとタマルのとんでもない出来事から生まれた子を通して将来救い主メシアは出たのです。これは信じられないような話です。普通ならこれは恥ずべきスキャンダラスな話であって、神聖な宗教の正典には載せずに隠したいと思う話ではないでしょうか。しかしここに聖書が語る神の救いはただ恵みによるということがはっきり示されています。どんな罪人でも救われ得る。神が与えてくださった救い主は罪人の救い主です。ユダのように悔い改める者は誰でもこれを受けることができます。最悪の罪を犯した人でもそうです。だからどんな人でもこの救い主により頼み、ただ神の恵みによって救いを得るように！と聖書は私たちに語りかけています。

私たちはどうでしょうか。本当は自分が悪いのに、その責任を他人に押し付け、他人のせいにして生きていることはないでしょうか。自分の罪が見えていない以前のユダに似ていることはないでしょうか。しかし今日の章は自分の罪を認める人、自分にごそ問題があることを認めて悔い改める人こそ幸いであると語っています。私たちもこの道を行く者たちでありたいと思います。自分に罪があると示されるなら彼のように素直に認めて心砕かれる人。そしてそんな者を顧みてくださる憐れみの神を見上げてより頼む人。そういう人を神は蔑まず、むしろその人を喜んで赦し、豊かな祝福で

取り囲んでくださいます。この恵みのプロセスを経て、その人はもっと他の人に同情し、他の人を思いやることのできる人、そして救い主を指し示して励まし、力づけることのできる人とされて行きます。その主の恵みに私たちが深くあずかって、主の愛と恵みを証しし、主のみわざのために用いていただける幸いに歩む者とされて行きたいと願います。